



愛さずにいられない(做頭 / Hands In The Hair)

2006(平成18)年9月25日鑑賞(東映試写室)

監督=ジャン・チョン / 製作総指揮=スタンリー・クワン / 原作=唐穎『紅顔』 / 出演=關之琳 / 霍建華 / 吳鎮宇 (日本スカイウェイ配給 / 2005年中国映画 / 101分)

……上海を舞台に、香港の美人女優と台湾のイケメン俳優を起用した中国映画だが、中国映画には珍しく(?)、そのテーマは美しい人妻との禁断の恋……。最大の注目点は、カリスマ美容師に髪をシャンプーしてもらう中から生まれてくる、官能美いっぱいでの過激なセックスシーン。「髪は女の命」とはよく言ったもの……。その意味では、邦題よりも原題の『做頭』、英題の『Hands In The Hair』の方がピッタリだが……。

🎬 テーマは「禁断の恋」

「禁断の恋」、とりわけ年上の美しい人妻と若い男とのそれは、世界中の誰もが大好きなテーマ(?)で、一般的にはフランス文学やフランス映画がその宝庫だが、中国文学や中国映画ではまだ珍しいもの。しかし、改革開放政策が進んで経済的に豊かになり、一部富裕層に自由恋愛や不倫の波が広がっていくと、中国でも次第に「禁断の恋」が大はやり。とりわけ上海では……? 「禁断の恋」をテーマとした最近の韓国映画は『密愛』(02年)だったが、中国では上海の人気女性作家、唐穎の『紅顔』を原作にしたこの映画。日本と同じように中国でも、若い女性作家による性の解放を描いた小説は、衛慧の『上海ベイベー』(99年)、『衛慧みたいにクレイジー』(04年)、『ブッダと結婚』(05年)などが大ヒットしているが、これからは中国でもフランス並みにこんなテーマの映画が続々と……?

上海にもカリスマ美容師が……

日本では一時、カリスマ美容師が大はやりだったが、上海にもそれはいる。この映画では「明星理髪店」に勤めている阿華がそれ。カットの腕がよく、若くてハンサムそして女性客の扱いがうまければ、そんな美容師目当ての有閑マダムたちが押し寄せてくるのは世の習い。そんな「おいしい役」を演ずるのは、台湾の若手イケメン人気俳優で、映画初出演となる霍建華^{ウォレス・フオ}。今、明星理髪店にはアメリカ帰りのハデハデしい女が久しぶりに来店し、阿華をご指名したが……。

女主人公は40歳の人妻

愛妮^{エニー}は、かつて明星理髪店でモデルとなっていたほどの評判の美人。しかし今は、真面目だが貧乏で冴えない新聞記者の夫（呉鎮宇^{フランシス・ン}）と、一人っ子政策のせいもあってわがまま放題に育ち持て余し気味の一人娘という3人家族で、平凡な主婦としての生活を送っている。昔のような贅沢ができない彼女の唯一の楽しみは、今でも自分の写真が飾ってある明星理髪店に行き髪をカットしてもらうこと。

そんな40歳の人妻役を、目が大きく印象的な顔立ちの香港の美人女優、關之琳^{ロザムンド・クワン}が演じている。もちろん、お店で彼女のお相手をするのは、10年来彼女の髪をカットしている阿華。ところが、今日は後から割り込んできたアメリカ帰りの女が、強引に阿華を独占。当然面白くない愛妮だったが……。ちなみに、關之琳は『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・チャイナ』の第6弾『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・チャイナ&アメリカ/天地風雲』(97年)で、李連杰^{ジェット・リー}と共演した美人女優だが、日本では、あの藤原紀香にそっくり……？

人妻の日常生活での不満と性的欲求のはけ口は……？

若い頃は華やかな生活の中にドップリと浸っていたこんな美人が、なぜ貧乏記者と結婚したのかは、映画の中で少しずつ語られていく。私から見れば、この亭主は実にいい奴で、グチひとつこぼさずに家族のために一生懸命働き、妻にはできるだけ自由に贅沢させてやろうと努力していることが明らか。ところが、愛妮にしてみれば、大成功した男と結婚したかつての友人から施しを受けるような生活は我慢できないもの……。また、夫との間の性生活までは覗き見ることはできないが、アパートの隣に

住むラッパ吹きの子の性的好奇心に満ちたネチネチした目を見ていると、愛妮にはその方面の欲求不満があることもミエミエ……？ したがって、愛妮が明星理髪店へ行き、阿華から髪をカットしてもらったり、シャンプーしてもらうのは、他の女性客と同じように「ひよっとしたら……」という次の展開への期待感もあったはず……？ そんな人妻の日常生活での不満とイライラを關之琳が実に見事に演じており、その性的欲求不満がいつ、どんな形で爆発するのかがその後の興味の的に……。

かなり身勝手な決断だが……

新たな阿華への追っかけファンが増大する中、明星理髪店における愛妮の相対的地位は低下していったが、そんな明星理髪店も遂に閉鎖されることに……。そこで注目されるのが阿華の移籍先だが、そんな中、愛妮は遂に夫と娘を捨てて家を出ていくという決断を。もっとも、これは正式な離婚ではなさそう……。

愛妮の計算は、外国に移住した兄が残していったアパートの部屋に移り、そこで阿華と一緒に暮らすというものだから、これはかなり一方的で愛妮に都合のいい計画。しかし、やさしい夫はそれを認めてくれたため、愛妮は「もうわがまは言わないから……」と泣きじゃくる娘も捨てて家を出ていく決断を……。これはかなり身勝手な決断だが……。

阿華の選択は……？

男の私から見ても阿華はたしかにいい男だが、どちらかというとなんか優柔不断な気味。もっとも、女性客相手の人気商売だから、あまりはっきりモノを言えないのもわからないではないが……。したがって、愛妮が亭主と娘を捨てて待っているにもかかわらず、阿華はその部屋に姿を現さなかった。それは、その時、阿華はある女性実業家から提案された新しいヘアサロンへの勧誘話に乗るか、それとも愛妮との愛に生きるかについて大いに悩んでいたため。そんな彼の選択は……？

最後の約束とは……？

映画はこんな調子で淡々と(?)美しい人妻を中心とした物語を進めていき、私が期待していたような官能シーンはなかなか登場しない。そればかりか、逆に阿華は愛妮と別れて、現実的な路線を走っていきそう……。

そんな2人の間で交わされた最後の約束は、愛妮が最後のシャンプーを阿華にしてもらうこと。もちろん、気持ちよくそれを承諾した阿華だったから、その後の興味的はいつ、どこでそれをやるのかということに。と思っていると、2人が行って行ったのは、既に閉鎖されたものの、思い出がいっぱい詰まったあの明星理髪店。さて、そこでのシャンプーシーンは……？

セックスシーンあれこれ……？

チェン・カイコー
陳凱歌監督が、ヘザー・グラハムを起用した映画『キリング・ミー・ソフトリー』(01年)では、ハリウッド進出を意識した(?)過激でハードなセックスシーンにビックリしたが、本作におけるそれは、1度だけのきわめて抑えられたものながら、中国映画史上に残る名セックスシーン。日活ロマンポルノが、アダルトビデオと違って名作が多く、今なお多くの映画館で上映されているのは、そのストーリー性とともにセックスシーンの描き方の妙……。つまり、何でもモロに見せてセックスを描けば観客が興奮し感激するわけではなく、観客のエロ心を刺激するのは、あくまで知的作業……。フランス映画の『エマニエル夫人』(74年)が、未だにその方面の名作として語り継がれているのはそのため……？

中国映画史上に残る名セックスシーン

本作におけるセックスシーンは、ラスト近くの1シーンだけ登場するが、それは阿華が愛妮の髪をシャンプーするシーン。阿華にすべてを委ねて髪の毛をシャンプーしてもらっている愛妮が、阿華の指先の動きによって次第に性的興奮を覚え、シャワーのお湯が飛び散る中で結ばれるという、何とも思わせぶりのシーンは、モロに見せるそれよりも官能的で観客の興奮をそそるもの。「髪は女の命」とはよく言ったもの……。この映画の原題は『做頭』、英題は『Hands In The Hair』だが、邦題よりもこちらの方が、最大の見どころであるこのセックスシーンを暗示するもので、適切だと思っただけ……。

2006(平成18)年9月26日記